

BOOK REVIEW

東京の原風景

川添登 著 ちくま学芸文庫

晩春のある日曜日の午後、妻と私は戸山町のあたりをぶらついていた。まるで田園にでもいる思いだった。うねうねと曲がる小道、ときおり現われ出る緑、小さな丘、藪で覆われた窪地、切れ切れの空き地……けれどもそこは都市、大都市であった——ひとつの世界である。そして私たちはそのなかにいた。けれどもはるか遠くにいた。おそらくある日曜日の午後には、そうでなければならなかったのだろう。巨大な都市の中心で人の心を解き放つ自然……。

ビルに覆われた東京の街中を歩いていると、時としてこんな幻想におそわれることがあります。ここに引いたのはオギュスタン・ベルク「風土の日本」(ちくま学芸文庫)の一節ですが、東京は大都市であるからこそ、こんな幻想を喚起する土地の力が強いのかもかもしれません。そこには鄙から都へという東京の膨張の過程が、土地の変遷の歴史となってふりつもっているからです。

日本語でただ「花」といえば、もちろん桜をさすのはいうまでもありませんが、その現代における代表的な品種「ソメイヨシノ」が、現在の駒込の近くにあった植木の里、染井村から名をかりていることは周知の事実です。江戸初期から桜の名所であった上野から将軍吉宗が染井の桜を植えて開発した飛鳥山にいたる上野台地の丘、それと背中あわせに走る本郷台地上の染井のつつじ、巣鴨の菊と、江戸の絢爛たる園芸文化はまず江戸城を“掌”中にとらえる山の手の手筋の上に展開します。染井は山の手に広がる武家や寺社の庭園への植木の供給基地として誕生し、庶民の行楽の地へと発展しました。やがて時代が下ると、向島、堀切、大久保、入谷、団子坂へと、山の手の担っていた園芸のセンターは拡散し、モザイク状に江戸の街を押し広げてゆきます。また一方では花の名所や植木の里といったいわば都市園芸文化の骨格のうえに、桜草や水仙売りの声が田園の風を織り込んでゆきます。

上野山から飛鳥山へいたる連丘上に立って、足下に広がる沖積平野を一望のもとに見下ろしながら、そのところどころに沼沢をもった田園とその中を満々と水をたたえて流れる荒川、隅田川に白帆がゆきかう、といった江戸の「原風景」は、第二次大戦下のB29の爆撃による焼野が原の光景、という著者の東京の「原風景」のうえに、枯れ木に咲く花の幻のように広がってゆきます。幕末に日本にやってきたプラントハンターとして最も名高いロバート・フォーチュンをして、世界のどこでも見たことがないと言わしめた江戸～東京の園芸文化は、庭園と自然といった安易な対立の中ではなく、江戸～東京の街自体を、その中に営まれる人々の生活までも取り込んだひとつの庭園都市として眺める著者の視点によって、初めてその本質を浮かび上がらせることでしよう。

江戸にあって、現存はしないものの最大の庭園であった戸山荘が、御町屋と呼ばれるひとつの街をそのまま庭園内にもっていたことは、そのひとつの象徴であるような気がします。江戸というひとつの庭園の中に街があり、その街の中に庭があり、その庭の中にまた街がある、この入れ子状の構造が庭を庭として在らしめている我々の視線の鍵をにぎっているのかもかもしれません。